

平成28年度 第2回（震災後第66回） 陸前高田市保健医療福祉未来図会議 議事録

テーマ：「下和野市民交流プラザから学ぶコミュニティの自発的な拡がりを促進していくためには」

日 時：平成28年5月27日(金) 13:30～15:30

場 所：陸前高田市役所 4号棟第6会議室

参 加：47名 14団体

資 料：下記にアップ

<http://www.koshu-eisei.net/saigai/rikuzentakatakaigi.html>

1. 挨拶

菅野民生部長

今回の未来図会議は、4月に続き「コミュニティについて考えよう」という場になっている。具体的な話も含めて意見交流をしていただき、今後、陸前高田市の各地区でコミュニティを形成するための参考になればありがたい。ぜひ活発な意見交流をお願いしたい。

2. 内容

(1) 未来図会議のめざすところと「これから」

・陸前高田市地域包括ケアアドバイザー 岩室紳也氏

(2) 報告

報告①「陸前高田市、大槌町における応急仮設住宅訪問調査の結果から」

・岩手県大船渡保健所 所長 久保慶祐氏

報告②「下和野市民交流プラザの1年を振り返って」

・社会福祉協議会 市民交流プラザ常駐員 阿部裕美さん

報告③「下和野団地自治会の活動について」

・下和野団地自治会 自治会長 臼井佐一さん

報告④「下和野復興公営住宅について行政の視点から」

・地域福祉課 課長 高橋良明

※その他参加者のみなさんから

他地区の公営住宅の取組みや、関係団体の工夫、栃ヶ沢公営住宅の準備状況
など……

(3) グループで「はまってけらいん、かだってけらいん」

- ・テーマ：報告から見えてきた課題とこれからの具体的な取組みに向けて
～下和野での活動がさらに広がっていくためには、他の地域において進めていくためには～

(1) 未来図会議のめざすところと「これから」

(陸前高田市地域包括ケアアドバイザー 岩室紳也氏)

本日は、この未来図会議がなぜ行われているのか、そこから何が生まれていくのかを皆さんと確認したい。

震災後といえば自殺の問題がある。2011年まで若い世代の自殺がふえてきたが、これは、若い世代へのサポートがないからと考えられる。そこで国は「健康日本21」という健康づくりの中でソーシャル・キャピタルの向上、地域のつながりを強化しようと言っている。

つながりと言えばこの「絆」である。「きずな」と読むが、もう一つ「ほだし」(手かせ・足かせ・束縛・迷惑)と読む。実は、このソーシャル・キャピタルの要素は「信頼」「ネットワーク(きずな)」「お互いさま(ほだし)」であり、この3つがそろると地域のつながりも強化される。「きずな」「ほだし」が醸成されたところでは、自殺も少ないことがわかっている。さらに、自治活動が盛んになり行政効率もよくなってくる。

未来図会議は、どのようにつながりを強化し、コミュニティをつくるのかという考え方を共有する場。仮設住宅の現状に学び、下和野では、どうつながりを強化してコミュニティをつくってきたのか教えていただきたい。

(2) 報告①「陸前高田市、大槌町における応急仮設住宅訪問調査の結果から」

(岩手県大船渡保健所 所長 久保慶祐氏)

昨年の7月から今年の1月まで仮設住宅の健康調査をした結果を報告する。

聞き取り調査は、陸前高田市45団地中31団地、大槌町31団地で行い、住宅状況・生活状況・健康状態・コミュニティ状況などを尋ねる一定の質問票に沿って実施。並行してアンケートもお願いし、自治会長だけではなく多くの方を対象に調査を行った。アンケートの項目は、心の健康状態や住居の状況、医療機関への受診状況、医療アクセスなどである。

住居に関する結果では、「仮設住宅」という一くくりにはできない。相対的に快適性が高いところもあれば、厳しいところもある。建てているハウスメーカーも種類があり、施工業者や建築時期によっても相当違う。防音性は、横並びの間取りでは独立性は保てるが、縦並びの間取りでは家族間でもプライバシーがなくなるという問題があることもわかった。

健康面に関しては、交通が不便になったことがあり心配していたが、病院だけは行っている方が多く、震災前より「自分の体は自分で守らなければいけない」と答えた方も多かった。

見守りは生活支援相談員や社協、予防医学協会の方が来て、気になる人がいれば適切な場所につなぐということが行われている。

生活の状況。仮設団地は20戸～200戸ほどの大きなところまであるが、話を聞くと楽なのは、やはり同じ集落出身の団地だということ。一番大きな関心事は「終の住まい」だが、自

治会長に聞くと「災害公営住宅の人気のない」。特に高齢の方は「鉄の扉が嫌だ」という。皆さん、一戸建ての大きな家に住んでいた方が多く、集団住宅に移ることに心理的な抵抗が大きいことがわかった。

アンケート結果は心の健康を点数であらわし、13点以上が少し心配な人たちとなるが、大槌町・陸前高田が13%、16%と割合が少し高くなっており、長期の仮設住宅で疲れてきているのではないかと思う。岩手医科大学が最近行った調査では、心の健康の点数は高くなっていくという結果も出ており、ある程度実態を反映していると思っている。また、陸前高田の仮設住宅ごとの心の健康の点数は、アクセスが不便だというところでは点数が高く、利便性のいいところでは多少落ちついている。

調査結果をまとめると、生活の質を決めるのは住居の快適性、交通アクセス、コミュニティの居心地のよさだと考える。これは、一般のアパートやマンションでも同じようなことはあるが、仮設住宅は自分で住むところを選択する余地は少ないため、コミュニティの居心地のよさが大事だと思う。

災害公営住宅でのコミュニティ形成は、単身者や高齢者を対象としたほうがいいと思うが、いろいろな形で地域のつながりを保っていくことは大事である。例えば一つのアイデアとして、和歌山県白浜町では「防災をスマートフォンでアナウンス」「子育て世代へのサービスを町から流す」ということを行っており、働き盛りの方や若い方は、IT・ICTを使ったコミュニティ形成も可能性があると思う。また、数の多さをメリットにすることも大切な視点である。

地域包括ケアアドバイザー 岩室紳也氏：

先生に確認したいが、震災前より健康意識が上がったのは何か影響があるのか。

岩手県大船渡保健所 所長 久保慶祐氏：

命を大事にしなければいけないという思いは、言葉に出さずとも訪問した皆さんから感じることができた。実際に沿岸の自殺率は震災以降、一貫して下がっている。

(2) 報告②「下和野市民交流プラザの1年を振り返って」

(社会福祉協議会 市民交流プラザ常駐員 阿部裕美氏)

市民交流プラザは昨年4月22日に開設し、1周年を迎え、記念まつりを開催した。

交流プラザを利用していない方や愛ネットさんにも協力いただいて、ちらし寿司を150食つくり、皆さんに振る舞い楽しく食べた。余興は、団地の住人だけではなく、生活相談員の呼びかけで地域住民も一緒に「はまってよさこい」を披露。余興の合間には団地で行われているサークル活動などの報告や紹介・参加や熊本震災の募金の呼びかけもあり、この日も多くの方が募金に協力をしてくれた。

住民から「私たちも社協と一緒に何かやりたい。1周年をみんなで一緒にお祝いしたい」という声があり、花笠音頭を一緒に行うことができた。住民の皆さんもとても喜び、「一緒にやった」という達成感を得たようだ。石木先生は、ことしから二又診療所に異動したが、診

療を終えて駆けつけてくれ一緒に餅まきをした。この餅も住民が3日ばかりで準備してつくってくれた。

交流プラザを利用する人、しない人にかかわらず、たくさんの住民の方々が自発的に協力し、動いてくれた祭りだった。この1年間、さまざまなきっかけづくりやイベントなどの積み重ねをしてきたことで、下和野団地のコミュニティの輪は広がってきていると感じている。

地域包括ケアアドバイザー 岩室紳也氏:

記念まつりには、今まで交流がない方も参加したが、今回はどんなメンバーで企画をしたのか。

社会福祉協議会 市民交流プラザ常駐員 阿部裕美氏:

交流プラザを利用している住民を中心に、生活相談員やスタッフがたたき台を用意して呼びかけ、それに協力する形で肉づけされた。

(2) 報告③「下和野団地自治会の活動について」

(下和野団地自治会 自治会長 白井佐一氏)

一昨年10月に入居して1年6カ月になる。団地の集会室は1号棟は7階、2号棟は6階にある。2号棟の中には5つの集会所があるが、主に4号、5号を使用。役員会も5号で行うが、二重サッシで外の音が入ってこないため快適である。入居後すぐに岩手大学農学部の先生の研修で、「コミュニティとは自治会長に従うものでもない。皆さんが気づいてやらなければだめだ」という話があった。まさにそのとおりだと思うが、なかなかそうはいっていない。

現在120世帯中、119戸入居しており、自治会費として毎月1,200円を集めているが、未納者は一人もいない。ことしは90万円ほど黒字になっている。決算を皆さんに説明しようと考えている。

総会で役員を改選するが、来年は移転者が続々と出てくるため一般住宅に移転した方からも募集をするそうである。私も間もなく70歳になるが、60代の方が少なく70代、80代の方が多。60代以下の方は皆さん働いているため、どうするか考えている。

「今後のコミュニティをどのようにつくっていくか」という課題はあるが、幸い1階に交流プラザがあり、プラザの阿部さんのおかげで「お昼を食べる会」が月に1回開催されている。自治会が何かやるのではなく、皆さんが来てやってくれる。去年のお祭りは盛岡の福祉専門学校が来た。ことしはスタッフが足りないと話しているが、何かの形でやりたいと思っている。よろしくお願ひしたい。

(2) 報告④「下和野復興公営住宅について行政の視点から」

(地域福祉課 課長 高橋良明)

当初から下和野団地にかかわり、その中で行政として反省している点は、「困り事への対応が個別対応となった」「その場しのぎで対応した」「ある程度自分でできている方への対応が

後手に回ってしまった」などがある。また、仮設から災害公営住宅に入居した直後に心身のバランスを崩す方が多かったが、その方々への支援がもっと必要だったのではないのかと反省している。そして一番大きな問題は、行政職員はコミュニティ支援での経験が余りないため、知識やノウハウが欠如していたのではないかと考えている。

しかし、交流プラザが完成したことで、さまざまな困り事への対応や問題の共有ができた。また、世帯調査の際、交流プラザを窓口にしたことで、かかわりもできてきたと感じている。一番大きいことは、自治会の活動がだんだんと発展して、企画やサロン、畑、健康づくりなどの自治会活動をきっかけに、出かけてきてくれるようになったことだと思っている。

個人的には、顔の見える関係づくりがコミュニティづくりの王道と考える。そのためには、入居する前から集まる機会を行政側としても意図的に設けていかなければならない。ハイリスクの方々だけを対象とした活動ではなく、問題が起きる前に広く住民で支え合いのできる取り組みも今後強めていかなければならない。現状を把握し、「行政のできること」「自治会のできること」「近隣の方のできること」「家族のできること」を組み合わせ、さまざまなことを行っていく。他人ごととしてではなく、自分のこととして行政を初め皆さんで捉えていければ変わってくると感じている。

地域包括ケアアドバイザー 岩室紳也氏：

行政の中でコミュニティをつくる担当部署はどこが適切だと思うか。

民生部 高橋地域福祉課長：

行政よりも「地域の方々の力をどう出してもらおうか」を考えていくものだと思っている。

地域包括ケアアドバイザー 佐々木亮平氏：

西下にプラザはないが、率直なところを聞かせていただきたい。

黄川田氏：西下災害復興公営住宅【2014年12月入居開始、36/40戸】

西下団地の周りは草だらけで、月の第1日曜日に皆さんと掃除や草刈りをしている。コミュニティについては、隣同士と顔を合わせるのが一番だと思う。

陸前高田市社会福祉協議会生活支援相談員 松本氏：

中田災害復興公営住宅【2015年11月入居開始、129/197戸、2015年12月自治会設立】

私たちが自治会長情報交換会を開いており、中田の自治会長が「コミュニティ活動をやりたい」「女性部や青年部を立ち上げたい」という話をしていたため、定期的な集まりが多いが、同じ西和野仮設から来た人たちのつながりから発展しているのではないかと感じている。

特定非営利活動法人ワーカーズコープ 勝沼氏：

顔の見える関係が、これからのコミュニティをつくる中で一番必要なところだと思っている。外部の力も必要だと思うが、私たちは地域で支え合える、手づくり感のあるサロン活動

をずっと行っている。今後も地域住民が主体となつて行えるサロン活動をしていきたい。

陸前高田市まちづくり協働センター 三浦氏：

栃ヶ沢に県内でも最大規模に近い公営住宅ができるが、住民や行政・支援団体も、どのようなコミュニティづくりの手伝いができるのか、みんなで考える機会を設定している。

(3) グループで「はまってけらいん、かだつてけらいん」

報告から見えてきた課題とこれからの具体例な取り組みに向けて

1 グループ発表：民生部細谷子ども子育て課長

草刈等をするとき、外トイレが使えないので不便があるという意見が出た。

地域包括ケアアドバイザー 佐々木亮平氏：

今後において何かあるか。

民生部細谷子ども子育て課長：

自治会費が裕福という話もあり、臼井会長の手腕だと思う。

2 グループ発表：気仙沼市唐桑総合支所 吉田定子保健師

仕掛けるきっかけが大事だということは、交流プラザがすごくいい味を出していたことでわかる。交流プラザがないところではどうしたらいいかという課題があるが、家族がいてもいなくても、顔の見える関係につなげていくということが「支え合う」ことにつながると感じた。

3 グループ発表：民生部保健課千葉春香保健師

入居前から顔の見える関係性をつくるには、住民だけの主体的な活動には限界があり、情報をキャッチすることは難しいという意見が出た。最初の1回目、2回目の集会は行政が働きかけて人を集め、顔つなぎをしてほしいという意見もあった。

4 グループ発表：民生部保健課千葉愛実保健師

老人クラブと道路の掃除やお茶飲み会が開催されているが、それを連絡係が新しく入ってきた方に知らせて誘っている。先日のチャレンジデーも皆さんで草取りをして盛り上がったという話を聞いた。

5 グループ発表：民生部保健課佐藤包括支援係長

小友町の西下は1人世帯や高齢者が多い団地だが、全員が月1回の掃除へ出てくるという驚きの結果がある。また、集会室に鍵をかけていない。鍵をかけないから、子供たちが学校帰りに集会室に寄ってみんなで遊んだり、高齢になるとトイレの問題もあるため、外から帰

って、自分の部屋に行くまでに間に合わない可能性がある方は、集会室のトイレを使えるということは参考になると思う。

毎月定例会を開いているので、みんなが顔を合わせるきっかけになるが、イベントを開くのも一つであり、下和野で行った1周年記念のイベントは「難しいが、やってみよう」という声が上がった。

6 グループ発表：民生部保健課高橋成美保健師

高田に、ほかの地区から来て活動している方々、「おもてなしの心」など、いろいろしてくれた。本人たちは「全然やっていない」と言うが、充実した活動をしており「謙遜している」という話があった。

中田公営住宅のコミュニティづくりが大変ということだが、大きくても小さくても大変さはあるという話があった。

高田町の栃ヶ沢仮設住宅の方が、ことしの夏に栃ヶ沢の団地、市役所の前の団地に引っ越し方が多いそうである。そこで新しいコミュニティができると思うが、今までできていた仮設住宅時代の太石地区のコミュニティも引っ越しことによって薄くなってしまいう課題もあるという話が出た。

地域包括ケアアドバイザー 佐々木亮平氏：

法政大学の宮城先生から、感想も含めて一言いただきたい。

法政大学現代福祉学部 宮城孝教授：

陸前高田は仮設に残る方や3年以上住んでいる方がかなりいる。栃ヶ沢の災害公営に移るということで、ことしはこの違いが浮き彫りになる転換期ではないか。きょうのテーマである「新しいコミュニティづくり」は重要だと思う。また、久保先生の話も興味深かったが、相談ができない方もいる。弱い方や強い方に合わせた周りの支援が大事ではないかと思うが、私たちが少しでも考えて貢献できればと思っている。

地域包括ケアアドバイザー 岩室紳也氏：

大事なのは、コミュニティをかた苦しく考えず、いろいろな人がつながる環境を仕掛け続けることである。きょうは、そのあたりが共有できたと思う。

◇次回：平成28年6月17日（金）

メインテーマ（仮）：誰もが住みやすいまちづくりに向けて

～今ある差別の実感、できている・できていない合理的配慮

会場：市役所第4号棟第6会議室